

今日の一旬

平成二十一年 二十二年



村井昭三

弥陀ヶ原 餓鬼の田圃に 初時雨

小春日や 「謚」探究の 画展観る

七五三 色は匂へど 散りぬるを

元総理 寮歌高唱 体育日

文化の日 受賞夫妻の 晴れやかさ



露踏んで 頂上目指す 八合目

芋の葉の 露の転がる その先は

政治家の 襟元飾る 赤い羽根

コスモスを こよなく愛し 妻逝けり

敬老日 紙上に生きる 高齢者



名月や 剣立山 一望に

山形や クレーン車も出て いも煮会

初秋や 余生の余白 それとなく

盆踊り 商店街の 人寄せに

夕張の 汗の結晶 メロン食む



新涼や 西鎌尾根を おもむろに

西瓜切る 業孫たちに やって見せ

短夜や 越し方行方 こもごもに

名古屋場所 国技を賭けた 正念場

空梅雨に 大山の神 御腰上げ



竹生島 弁天様に 風薫る

紫陽花の 変化浮世の 様に似て

年毎に 出番減りゆく 浴衣がけ

青時雨 枯山水の 石組みに

時の日や きびしさつのもる 八十路坂



新茶添え 坊ちゃん団子 道後の湯

栗林の 榊月亭に 新茶飲む

遍路笠 新樹の中に 見え隠れ

善光寺 朝事の読経 夏めいて

鳥交る 佐渡の天空 トキが舞う



春雷に 情眠の夢は かき消され

潮干潟 沖合い霞む 海螢

花冷えや 期友の通夜の 「海行かば」

墨堤の 桜眼下に 新タワー

万愚節 真偽見分けの 訓練を



木の芽和え 左党の頃を 思い出す

北帰行 鳥風を待つ 司令塔

卒業の 紫袴 晴れやかに

納税期 妻の介護で 税還る

大宰府と 水府を結ぶ 梅便り



孫受験 娘懸命 サポーター

初句会 初心忘れぬ よすがとす

読初は 積んどく本へ 挑戦し

初場所や 魁皇樹てた 金字塔

大寒や 日本列島 陽気漬け



大晦日 来年こそを 期待して

好奇心 そそるマスクを 付けた人

マフラーに ファッションを巻く ヤング達

木枯らしや 世の暗雲を 吹き払え

タワビル 小春の池に ゆらめいて



ふるさとに 一夜庵あり 宗鑑忌

花嫁に 重なり浮かぶ 七五三

野毛山に 異国帰りの 霧笛聞く

役目終え 案山子は畦で 慰労会

蓮の露 薬師如来の 薬瓶に



鳥威 棚田一帯 どよもして

仙石の すすき分け入り 児等遊ぶ

戦火から 江戸を救いし 西郷忌

妻病んで 愁思四度の 淵深く

六段の 調べにゆれる 白い萩



静寂の 好文亭に 虫を聴く

炎天下 癒し求めて 寮歌祭

今一度 見たい朝焼け 剣岳

かがり火に 秋の鶉映し 錦川

阿波踊り 商店街に 出前連



桂浜 竜馬像下に 土用波

羅と 三味の音似合う 神楽坂

鰻の日 順番待ちの 老舗前

七夕や 逢瀬遮る 核細工

父の日に よせる笑顔の 妻無心



青池や 青に溶け入る 青蛙

夏至白夜 バルトの街を 夜もすがら

五月雨や 愚陀仏庵に 子規の声

夏なかば 阿修羅の像に 人溢れ

茶の緑 模様見事な 遠州路



わが寮歌 「若葉の古城」 ロズさぶ

宇治の香を 都踊りの 幕あいに

嵯峨の御所 大沢池に 花吹雪

来し方に 行く末おもう 暮の春

こわれゆく 妻との日々に 春惜しむ



球根を
いとし子のごと
春の土

弥生尽
観桜武蔵野
寮歌祭

彼岸への
橋のない川
滔滔(とうとう)と

万物の
鼓動を秘めて
春浅し

大森や
筵(ひび)消え残る
海苔の店



幕山や 幕一杯に 梅の花

中海 浮かぶ苗床 大根島

初午や 屋上稲荷 賑わいて

みどり児の 柔肌真似る 鶯餅

合格が 生涯決める 世がつづき



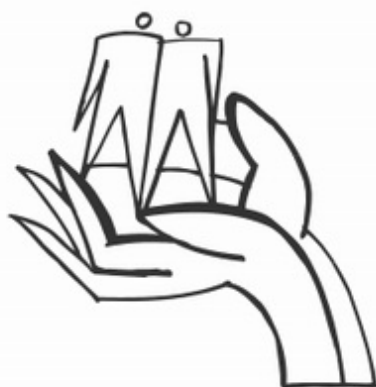
観るだけの マンション暮らし 苗木市

知らぬ間に 投句入選 晋翁忌

壺焼は 弁天様が 後ろ盾

春寒し 金婚の妻 要介護

梅の里 大日本史を 発信し



初午や 王子稲荷の 凧の市

遙かなり 二・二六の 兵に告ぐ

初夢は 青春回帰 覚めてなお

体調の 安否気遣う 賀状増え

去年今年 想定外の 変多く

